

慶長十五年版『倭玉篇』における 重出字に関する一考察

王 聿 舟

1. はじめに

『倭玉篇』は、中世に成立した一群の部首分類体の漢和辞書である。様々な目的と方針で編纂され、異なる書名で長い年月にわたって流布している。本研究では、慶長十五年（1610年）に刊行された版本（以下は『慶長版』と略して記す）を選定し、本書の重出字の実態を明らかにし、そこから辞書編纂の方針について考察を加える。

『慶長版』は上中下三巻で構成されている。掲出漢字は合計11,786字（筆者の集計結果より）であり、おおそ単字で排列されている。掲出字の右側ⁱに字音、下に和訓や漢字注などが掲載されている（表1）。

表1 『慶長版』玉部掲出字「碧」

掲出字	仮名音注	附訓
碧	ヘキ	タマ／アヲシ／ミドリ／アヲタマ／シヅノミトリ

『慶長版』に関する先行研究は数多く行われており、『倭玉篇』諸本における位置付けや他伝本との関係などはほぼ明らかになっているが、本書の掲載漢字についてはまだ不明な点が残っている。例えば、本研究で調査を行った全巻の掲出字のうち、重複掲載された漢字は332組667字で全体の約6%を占めている。複数の部首にまたがって重出する字は無論、同じ部首での重出も多数見られる。そのような一群の漢字についての考察はまだ十分ではないと言える。

本研究では、先行研究を踏まえつつ、『慶長版』における重出字の整理・集約を行う。まず、複数の部首に配属された漢字の特徴を分析し、『慶長版』の部首配属問題について考察を試みる。続いて、同じ部首に複数回出現した掲出字を集約し、重複掲載が生じた理由および『慶長版』の漢和辞書としての性格について検討する。

2. 先行研究

2.1 漢和辞書としての『慶長版』

『慶長版』の特徴として、『倭玉篇』系統の中でも非常に豊富な漢字と和訓が収録されていることが挙げられる。また、中田（1966）は「慶長以後、元和・寛永と、江戸時代に刊行された倭玉篇は数多く（中略）部首の順序はみな慶長整版本に従っている」と述べ、『慶長版』が近世に成立された『倭玉篇』の源流であると位置づけた。

『慶長版』の成り立ちについて、北（1969）は本書が『音訓篇立』『類字韻』両方から掲載内容を抄録したと述べた。また、鈴木（2006）は『慶長版』が『倭玉篇』諸本の中で極めて初期の版本であり、当時の多くの諸本を集成したものであると指摘した。同氏は慶長十五年版の部首や掲出字の配列、特定の部首の掲出字（群）などを取り上げて他の伝本と比較し、先行辞書からの影響を明らかにしている。具体的には、『慶長版』の部首立て・部首配列は中国辞書の『大広益会玉篇』に拠り、掲出字の配列は韻書の永禄本『類字韻』を基盤とし、古活字版四段本『倭玉篇』・『音訓篇立』・夢梅本『倭玉篇』（以下は『夢梅本』と略して記す）を増補資料として取り込んでいることを指摘している。

また、『慶長版』の掲載語彙を参照とした後発の漢和辞書として、近世に成立したとされる五卷本『字鏡』があげられる。川瀬（1955）・築島（1980）によって、本書の巻三・巻四・巻五（女部・車部を除く）は『慶長版』から抄出したことが明らかとなっている。該当する部首内の掲出字とともに「取（耳・又）」「韻（骨・頁）」といった重出字もそのまま引き継いだと見られる。一方、中野（2021）の調査結果によれば、『慶長版』の一部の掲出字が五卷本『字鏡』において一個前の部首に編入されている。例えば、「思」という『慶長版』に心部・思部にまたがって重複掲載された字例は『字鏡』においては心部に統合され、部内での重出となっている。

2.2 問題点

以上は、『慶長版』に関する先行研究をまとめたが、未だに残されているいくつかの問題点をここで示す。

まず、『慶長版』における重複掲載の数量および掲載実態に関する研究は未だに存在しない。個々の重出字を網羅的に調査し、掲載箇所などを提示する必要があると考えられる。

また、『慶長版』に見られる重出字の漢字構造の特徴、他の漢和辞書との関連性などはまだ明らかとなっていない。掲出字の重複掲載が単なる編纂側による誤植なのか、それとも意図的に行われたものなのかについても未だに解明されていない。

したがって、本研究は主に漢字の重複掲載に注目し、『慶長版』全編の掲載漢字を精査し、重出字の整理・集約を行う。また、先行研究で明らかとなった他辞書との参照関係を踏まえ、『慶長版』における重複掲載の形成経緯について考察を進める。

3. 研究方法

原本に見られるすべての重出字を正確かつ効率的に集約し、その字の仮名音注・漢字注・附訓を個々に抽出して比較を行うために、『慶長版』全文を整理・集約し、Excelでテキストデータを入力する。底本は、中田・北共編の『倭玉篇 研究並びに索引』(1966)に収録されている内閣文庫蔵本の影印本を使用する。

テーブルの構成は、高橋・池田・劉(2017)が構築した『夢梅本』の全文テキストデータベースを参考にする。テーブルは、①掲出字所在 ②(部首)番号 ③部首名 ④掲出字 ⑤異体字 ⑥漢字注 ⑦字音 ⑧和訓のフィールドで構成されている。

テーブルの一例は、表2で示している。このようにして慶長版『倭玉篇』本文の掲載語彙をすべて整理・集約した。続いて、Excelの「重複する値」を強調表示する機能で同じ内容ⁱⁱの項目(表2の場合は「禊」である)を抽出し、掲出字およびそれに対応する掲載内容の一覧表を作成し、考察を行った。

表2 掲出字「禊」「珙」「僊」「仙」の記入例

掲出字所在 ⁱⁱⁱ	番号	部首名	掲出字	異体字	漢字注	字音1	和訓1	和訓2
1_006_7_2	3	示	禊		日傍気也	シン	サカリ	
1_008_1_4	3	示	禊		妖気也	シン	サイハヒ	
1_009_3_4	7	玉	珙		大璧也	ソウ	タマ	
1_032_3_2	22	人	僊			セン	ヒジリ	ソマ
1_032_3_3	22	人	仙	僊	同上	セン		

4. 複数の部首に重複掲載されている重出字

4.1 一覧表・字体構造の特徴

前述の通り、『慶長版』においては、同じ漢字が複数の部首にまたがって掲出されているという重出字が多数存在する。例として、水部(252)^{iv}・魚部(346)両方に掲載されている「漁」と人部(22)・木部(145)に掲載されている「休」があげられる(図1図2)。本書に限ってみると、このような一群の漢字は複数の部首に配属され、二個以上の部首を有する字として捉えることができる。

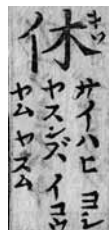
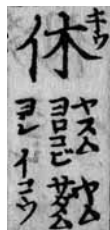
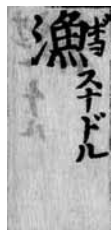
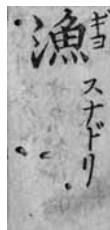


図1 水部「漁」(2_307_6_4)^v 魚部「漁」(3_404_7_2)

図2 人部「休」(1_042_1_3) 木部「休」(2_204_1_1)

『慶長版』全編の掲出字11,786字のうち、上記のような重出字が181組363字^{vi}見つかった。重出字は全巻にわたって散在し、特定の巻・部首に集中する傾向が見られない。漢字構成の特徴によって、複数の部首を有する重出字を分類すると、以下のようにまとめられる。

(イ) 漢字を構成する部品が同時に部首として扱われる例

字義と部首との対応関係に多少のずれが生じて、漢字を構成する部品である以上、該当する漢字の部首として扱える。典型的な例として、耳部・食部に掲載される「餌」や門部・耳部に掲載される「聞」があげられる。本来部首となるのは形声文字の意符としての「食・耳」であるにもかかわらず、声符（表音的な機能を持つ文字）の「耳・門」も部首として認識されるようになっている。このことから、一漢字の「偏」・「旁」もしくは「冠」・「脚」が同時に部首として扱われるようになる。（後述のように、『類字韻』と一致する重出字は下線で示す）

壓（土・厂）	安（女・宀）	棘（韋・束）	<u>辯（言・辨）</u>	<u>桑（木・爻）</u>	鳩（木・鳥）
炭（火・山）	<u>拘（手・句）</u>	<u>斛（斗・角）</u>	<u>頰（頁・水）</u>	局（口・尸）	強（弓・虫）
塹（土・西）	<u>鬱（林・鬱）</u>	<u>恵（心・恵）</u>	瞽（目・叵）	魘（鬼・厂）	个（丨・八）
𩇛（黒・厂）	鶯（燕・鳥）	蓋（艸・皿）	薤（艸・韭）	杲（木・日）	耿（耳・火）
<u>孝（老・子）</u>	<u>絞（交・糸）</u>	<u>號（号・虎）</u>	<u>侃（人・亝）</u>	<u>乾（軌・乙）</u>	<u>縈（欠・糸）</u>
鴈（厂・鳥）	剿（鼻・刀）	希（爻・巾）	<u>躬（身・呂）</u>	休（人・木）	蕪（艸・瓜）
<u>糾（糸・斗）</u>	<u>漁（水・魚）</u>	勗（力・日）	<u>緊（糸・𠂔）</u>	閤（言・門）	窪（穴・水）
化（人・匕）	<u>啓（口・支）</u>	龔（龍・共）	<u>束（木・束）</u>	審（言・宀）	<u>鉤（金・句）</u>
<u>恒（二・心）</u>	<u>侯（人・矢）</u>	<u>寇（宀・支）</u>	鵠（骨・鳥）	顛（頁・骨）	𩚑（鹵・勹）
塞（土・宀）	劊（竹・刀）	姿（女・欠）	<u>孜（支・子）</u>	師（臣・巾）	餌（耳・食）
臭（自・犬）	戢（口・戈）	籊（彳・竹）	讎（言・佳）	悉（心・采）	翔（羊・羽）
昶（永・日）	醜（鬼・酉）	聚（耳・攴）	脩（人・肉）	取（耳・又）	閤（王・門）
䟽（足・去）	助（目・力）	稱（禾・耂）	信（人・言）	晨（日・辰）	審（宀・采）
雖（佳・虫）	睢（目・佳）	栖（木・西）	妾（女・辛）	蒸（艸・火）	席（广・巾）
𩚑（尸・舛）	𩚑（禾・魚）	曾（日・八）	<u>恩（心・囟）</u>	<u>忽（心・囟）</u>	賊（戈・貝）
替（夫・日）	頽（秃・頁）	第（弟・竹）	礫（石・桀）	築（木・竹）	飭（力・食）
罍（弟・网）	懲（心・山）	鳩（木・鳥）	條（人・木）	<u>篤（竹・馬）</u>	<u>曇（雲・日）</u>
囊（衣・囊）	難（堇・佳）	孥（女・子）	<u>寧（巧・宀）</u>	簞（箕・皮）	敗（攴・貝）
茫（艸・水）	<u>範（竹・車）</u>	煩（頁・火）	鞞（皮・革）	必（心・八）	賔（宀・貝）
<u>𩇛（几・鳥）</u>	腐（肉・广）	碧（玉・石）	暴（夬・日）	墨（土・黒）	<u>牧（攴・牛）</u>
摩（手・广）	密（宀・山）	明（日・月）	貌（彡・兒）	勔（面・力）	攸（人・攴）
悶（心・門）	聞（耳・門）	問（口・門）	融（鬲・虫）	莅（人・艸）	<u>罣（言・网）</u>

要(女・臼) 庸(用・广) 杳(木・日) 料(米・斗) 類(頁・犬) 滷(鹵・水)

上記のような部首配属となる漢字は複数の部首に掲載される重出字の約八割を占めている。これらは、漢字を左右、上下に分解して得られる部品、つまり「偏旁」や「冠脚」が両方とも部首として扱われることが多い。

(ロ) 漢字本体が片方の部首となる例

漢字そのものが部首である場合、その漢字が該当する部首の「代表的」な字となり、その部の最初に掲載されるのが一般的であるが、『慶長版』における一部の漢字は該当する部首以外の部にも配属されている。

異(田・異)	易(勿・易)	豈(豈・山)	卧(臣・卧)	思(心・思)
苟(艸・苟)	采(木・采)	索(市・索)	音(音・日)	牀(木・牀)
習(日・習)	束(木・束・束)	單(𠂔・單)	重(壬・重)	

(ハ) 部首字形の類似による重出例

部首として扱われる構成部品はおそらく一つしかないだろうが、部首の字形の近似によって重複して掲載されている字例である。

月(肉・月)	<u>盍(血・皿)</u>	<u>𩚑(血・皿)</u>	期(肉・月)	朔(肉・月)
𩚑(儿・几)	<u>券(力・刀)</u>	𩚑(肉・月)	朦(肉・月)	朗(肉・月)
𩚑(肉・月)	杳(日・日)	容(宀・穴)	臨(臣・卧)	<u>崖(山・厓)</u>
<u>𩚑(云・雲)</u>	畏(田・田)	尤(尤・乙)	麾(麻・广)	奪(大・奞)
𩚑(収・丌)				

類似する(もしくは同じ)字形の部首を別々に掲載するため、本来字義的に一方の部首にのみ属す漢字が、二つの部首に掲載されるようになったと考えられる。例えば、月部の「月」「期」「朔」「𩚑」「朦」「朗」「𩚑」という一連の掲出字は、いずれも「肉」という字義に対応していないにもかかわらず、『慶長版』において肉部に配属されている。

ただし、『慶長版』における日部の掲出字7字のうち、字形が類似する日部にも掲載されているのは「杳」1字のみである。穴部の掲出字77字のうち、宀部に掲載されているのも「容」1字のみである。また血部の掲出字「盍」は「𩚑」「盍」と同じ漢字構造を有しているにもかかわらず、「皿」部に配属されていない。つまり、本分類の重出字の部首は恣意的に決められており、一定の基準に沿っていないと考えられる。

(二) 異体字による重出例

重複掲載となる部首のうち、片方の部首が普通の構成部品で、もう片方の部首が字義・字形的に該当する漢字と若干乖離しているものである。(▲で注記する)

解(角・心▲) 昊(日・𠂔▲) 𠂔(几▲・𠂔) 床(广・𠂔▲) 𠂔(心・𠂔▲)
登(収▲・𠂔) 棄(収▲・𠂔) 審(𠂔・采▲)

上記の場合、掲出字の字形からは▲の部首に属しているとは考えにくいですが、異体字の字形(図5)から見ると、該当する部首とのつながりがより明瞭となる。

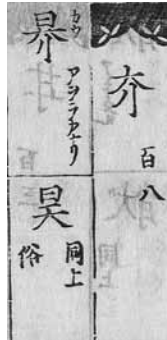


図5 「𠂔」部に掲載された「昊」(1_154_6_2)

解(𠂔)	→	心部	「同上」と明記
昊(𠂔)	→	𠂔部	「同上／俗」と明記
𠂔(𠂔)	→	几部	「同上」と明記
床(𠂔)	→	𠂔部	「同上／俗」と明記
登(𠂔)	→	収部	
棄(𠂔)	→	収部	「同上」と明記
審(𠂔)	→	采部	「同上」と明記
𠂔(𠂔)	→	心部	「同上／俗」と明記

上記の通り、一部の異体字関係が漢字注によって明記されている。異体字関係となる漢字の部首も配当されることにより、このような重複掲載が生じたため、重複掲載であるからといって「二つの部首を有する字」として扱うべきではないと考えられる。

4.2 先行する漢和辞書からの影響

『慶長版』と同じ時代に成立したキリシタン版『落葉集』「小玉篇」にも、複数の部首

にまたがって掲載される漢字が多数見られる。字義ではなく、字形によって漢字を部品ごとに分解し、複数の部首に配属するという発想は外国側と日本側の辞書編集者に共通していると見られる。にもかかわらず、「小玉篇」と『慶長版』に共通する重出字は「孝(老・子)」「翔(羊・羽)」など15例しかない。両書の部首立て・所収字数の相違⁷⁴も一つの原因であるが、両書の重出字の不一致をきたす主な原因は部首配属の方針の差異であると考えられる。検索上の便利を図り、漢字の構成部品が分解可能である掲出字(「加」を「力・口」に配属するなど)を積極的に異なる部首に重複掲載する「小玉篇」に対して、『慶長版』にはそのような傾向が見当たらない。字形から見ると異なる部首に配属することができるにもかかわらず、一つの部首のみに留まる掲出字が多数存在する。

また、『慶長版』は「小玉篇」に比べると個々の掲出字の部首配属に一貫性を欠くことも共通字の少なさの原因の一つとしてあげられる。白井(2012)が指摘するように、具体的には、「小玉篇」には漢字の「構」「繞」「垂」「偏」的な位置にある部分字体を優先して部首として扱うという傾向がある。例えば「閏」「閑」「間」は「王・木・日」部には現れず、門部のみに掲載された単一部首の漢字となっている。それに対して、『慶長版』における重出字の部首の取捨選択には明確な基準が見当たらず、完全に字義によるものでもない。例えば「閏」は門部・王部に属しているが、「閑」⁷⁵「間」が門部のみに掲載されているのは、その一例である。

そこで、

- ① 何故『慶長版』に多数の重出字が現れたのか
- ② このような重複掲載は『慶長版』に特有・独創的なものだろうか
- ③ なぜ『慶長版』における重出字の部首配属が恣意的となっているのだろうか

の三点について、ほかの『倭玉篇』伝本との比較を通じて検討を加える。

『慶長版』の部首立ては漢字辞書の『大広益会玉篇』を藍本とし、一部改編を加えて477部となっている。その部数は漢和辞書の中でもかなり膨大であり、十分に洗練されているとは言い難い。したがって、すべての掲出字を通観したうえ、何らかの明確かつ独創的な方針に従い、意図的に掲出字を複数の部首に配属することを実行した可能性はあるものの、相当な困難な作業だと考える。一字一字を積極的に重複掲載すると、辞書の規模がさらに肥大化し、かえって編纂上の不便をもたらすおそれがある。そのため、先行する他の辞書から影響を受けたか、少なくとも他の辞書での重複掲載を見、その漢字を複数の部首に配属しても妥当であろうと編纂側が考えた、という可能性が比較的高いと思われる。

4.2.1 永禄本『類字韻』からの継承

『慶長版』の編纂資料とされる漢和辞書として、まずは永禄6年に書写された『類字韻』(以下『類字韻』と記す)があげられる。両書の関連性について、鈴木(2002a)鈴木(2002b)は、「(『慶長版』は)『類字韻』を基礎とし、『音訓篇立』や『夢梅本』により増

補を行ったもののなのである」と述べ、『類字韻』を『慶長版』の編纂の基礎資料と位置づけた。部首内の掲出字や字音・和訓などの掲載情報も参照している部分が多く、『慶長版』における重出字の一部も『類字韻』から影響を受けていると見られる。「漁」が水部・魚部両方に掲載され、それぞれ「スナドル」「スナドリ」の訓に対応している例や、「句」部の掲出字および個々の掲出字の掲載部首が上げられる。参考として、同じく句部を立てる宋本『大広益会玉篇』『夢梅本』（附部は略す）『説文解字』での該当字の部首を上げる。（相違のある字例は下線で示す）

類字韻	句	<u>拘</u> （手・句）	拘	鉤（金・句）	筍	<u>鉤</u>		
慶長版	句	<u>拘</u> （手・句）	拘	鉤（金・句）	筍	<u>鉤</u>		
会玉篇	句	𠂔	鉤（金・句）	<u>拘</u>	拘	筍	<u>鉤</u> （豆・句）	𠂔 𠂔
夢梅本	句	𠂔	鉤（金・句）	<u>拘</u>	拘	筍	<u>鉤</u> （豆・句）	𠂔 𠂔
說文解字	句	拘	鉤	筍				

『説文解字』によると、「句・拘・鉤・筍」という四字は字義的に「句」「手」「金」「竹」に属するが、字形的には「句」部に分類されている。それに対して、『慶長版』『類字韻』両書ともに「拘」が「手・句」部に重複掲載されている一方、「筍」が竹部に現れていない。また両書とも「鉤」を「句」という単一部首に配属し、『夢梅本』などと異なる様相を呈している。つまり、句部の掲出字の場合、『慶長版』は『類字韻』から掲出字を抄録するとともに部首認識も引き継いだとみられる。掲出字の部首配属および掲載位置からみると、ほかには「桑（叒・木）」「寧（宀・巧）」「券（力・刀）」などの字例（第4章第1節の重出字一覧で下線で示す）も、両方の部首とも『類字韻』から得たと見られる。

それ以外の重出字には、元来の部首のほか、さらに新たな部首を一つ追加したような形で重複して掲載されるものが多い。漢字の構成部品のうち、視覚的に部首となりうるもので、かつ『慶長版』において部首として立てられるものであれば、該当字の部首として追加される可能性がある。例えば、『類字韻』における「炭」「聞」「安」「穌」はそれぞれ火部・耳部・宀部・禾部にしか掲載されないが、『慶長版』においては山・門・女・魚という「冠構脚偏」となる部首にも現れている。このような追加部首に対応する掲出字の一部は以下の通りである。

表3 部首が追加されたと思われる重出字

掲出字	類字韻部首	類字韻字音・和訓	慶長版部首	慶長版注・和訓
席	广	(セキ) シキイ／ヤスシ／ ムシロ シク／ニハムシロ	广	(セキ) シキイ／ヤスシ／ムシロ／ シク／ニハムシロ
			巾	(セキ／シヤク) ムシロ
炭	火	(タン) スミ／アラス	火	(タン) スミ／アラス
			山	(タン) ニワカ
墨	黒	(ボク／モク) スミ	黒	(ボク／モク) スミ
			土	(モク) スミ

表3から見ると、上の部首が『類字韻』に拠るのに対して、下の部首は『慶長版』特有のもので、のちに追加されたと考えられる。『類字韻』から掲出字を一回抄録した後、ほかの部首に該当字をあらためて掲載し、新たに和訓を付け加えるという仕組みを推測する。このような系統的な部首追加は門部の掲出字にも現れている。

類字韻

悶 闕 闊 間 闞 閏 開 闡 閱 門 闔 闢 闚 聞 閒 闐 闖 閭 閫 閬 閭 閻 閼 閽 閾 閿 閼 閽 閸 閹
闠 闡 閃 颯 閤 閉 廣 閻 閺 閽 閽 間 閴 閵 閶 闙 闚 闛 關 閽 閽 閽 閽 閽 閽 閽 閽
闞 闟 闠 闡 闢 闢 闢 闢 闢 闢 闢 闢 闢

慶長版

闕 闐 問 闚 閨 開 闡 闖 閱 國 闊 闢 闢 間 聞 閑 闔 闞 閭 閻 閼 閽 閾 閿 閼 閽 閼 閼
闠 闡 闢 闢 閉 闢 闢 閉 闢 闢 闢 闢 闢 闢 闢 闢 闢 闢 闢 闢 闢 闢 闢 闢 闢 闢 闢
闢 闢

鈴木 (2002a) は、『類字韻』における「齒」部の掲出字の前半部分は『類字韻』に拠っていると指摘したが、「門」部の掲出字も同じ特徴を有していると思われる。上記の通り、いくつか順番を入れ替えられたところがありつつも、『慶長版』は『類字韻』における「闕」から「闡」の掲出字を抄録した後、「關闌 (中略) 闊闢」という下線部の掲出字を増補したと考えられる。追加された掲出字のうち、「問・聞・聞・聞」は『類字韻』に

以上の点から、『慶長版』に現れた一部の重複掲載は『類字韻』から引き継いだが、一部の部首における掲出字の増補・改編によって特有の重出字を有するようになっていていると結論づけられる。つまり、編纂の基礎資料である『類字韻』での部首配属を認めつつも、その基準に縛られず、ほかに部首となりうる部品があればそれを該当字の部首として扱ったこともある。また、後述の同じ部首での重複掲載と異なり、片方の重出字が意図的に削除された痕跡が見当たらない。

続いて、『慶長版』における重出字の成り立ちをさらに解明するため、編纂資料とされる『夢梅本』を取り上げ、両書の重出字の異同を比較する。

両書の参照関係について、鈴木（2002b）は『慶長版』「力」部は、前半部は『永禄本』（類字韻）と関聯性の見られる基礎部であり、後半部は『夢梅本』により増補された部分である事が明らかとなった。それは「雨」部・「日」部・「火」部でも同様である」と指摘した。このような増補が行われた結果、慶長版日部の掲出字の末尾に現れた「沓曾替沓習旨音」という一連の字例は、元の部首（『類字韻』基準）に「日」部が追加され、二つの部首を有する重複掲載となっている。ほかには、『慶長版』に掲出された「𩇛・𩇜」も『類字韻』から「黒・土」の部首を引き継いだと同時に、『夢梅本』から「𠂔」部を得たと見られる。（共通点のある配列は下線で示す）

厂 庀 𡩊 𡩋 𡩌 𡩍 𡩎 𡩏 𡩐 𡩑 𡩒 𡩓 𡩔 𡩕 𡩖 𡩗 𡩘 𡩙 𡩚 𡩛 𡩜 𡩝 𡩞 𡩟 𡩠 𡩡 𡩢 𡩣 𡩤 𡩥 𡩦 𡩧 𡩨 𡩩 𡩪 𡩫 𡩬 𡩭 𡩮 𡩯 𡩰 𡩱 𡩲 𡩳 𡩴 𡩵 𡩶 𡩷 𡩸 𡩹 𡩺 𡩻 𡩼 𡩽 𡩾 𡩿 𡪀 𡪁 𡪂 𡪃 𡪄 𡪅 𡪆 𡪇 𡪈 𡪉 𡪊 𡪋 𡪌 𡪍 𡪎 𡪏 𡪐 𡪑 𡪒 𡪓 𡪔 𡪕 𡪖 𡪗 𡪘 𡪙 𡪚 𡪛 𡪜 𡪝 𡪞 𡪟 𡪠 𡪡 𡪢 𡪣 𡪤 𡪥 𡪦 𡪧 𡪨 𡪩 𡪪 𡪫 𡪬 𡪭 𡪮 𡪯 𡪰 𡪱 𡪲 𡪳 𡪴 𡪵 𡪶 𡪷 𡪸 𡪹 𡪺 𡪻 𡪼 𡪽 𡪾 𡪿 𡫀 𡫁 𡫂 𡫃 𡫄 𡫅 𡫆 𡫇 𡫈 𡫉 𡫊 𡫋 𡫌 𡫍 𡫎 𡫏 𡫐 𡫑 𡫒 𡫓 𡫔 𡫕 𡫖 𡫗 𡫘 𡫙 𡫚 𡫛 𡫜 𡫝 𡫞 𡫟 𡫠 𡫡 𡫢 𡫣 𡫤 𡫥 𡫦 𡫧 𡫨 𡫩 𡫪 𡫫 𡫬 𡫭 𡫮 𡫯 𡫰 𡫱 𡫲 𡫳 𡫴 𡫵 𡫶 𡫷 𡫸 𡫹 𡫺 𡫻 𡫼 𡫽 𡫾 𡫿 𡬀 𡬁 𡬂 𡬃 𡬄 𡬅 𡬆 𡬇 𡬈 𡬉 𡬊 𡬋 𡬌 𡬍 𡬎 𡬏 𡬐 𡬑 𡬒 𡬓 𡬔 𡬕 𡬖 𡬗 𡬘 𡬙 𡬚 𡬛 𡬜 𡬝 𡬞 𡬟 𡬠 𡬡 𡬢 𡬣 𡬤 𡬥 𡬦 𡬧 𡬨 𡬩 𡬪 𡬫 𡬬 𡬭 𡬮 𡬯 𡬰 𡬱 𡬲 𡬳 𡬴 𡬵 𡬶 𡬷 𡬸 𡬹 𡬺 𡬻 𡬼 𡬽 𡬾 𡬿 𡭀 𡭁 𡭂 𡭃 𡭄 𡭅 𡭆 𡭇 𡭈 𡭉 𡭊 𡭋 𡭌 𡭍 𡭎 𡭏 𡭐 𡭑 𡭒 𡭓 𡭔 𡭕 𡭖 𡭗 𡭘 𡭙 𡭚 𡭛 𡭜 𡭝 𡭞 𡭟 𡭠 𡭡 𡭢 𡭣 𡭤 𡭥 𡭦 𡭧 𡭨 𡭩 𡭪 𡭫 𡭬 𡭭 𡭮 𡭯 𡭰 𡭱 𡭲 𡭳 𡭴 𡭵 𡭶 𡭷 𡭸 𡭹 𡭺 𡭻 𡭼 𡭽 𡭾 𡭿 𡮀 𡮁 𡮂 𡮃 𡮄 𡮅 𡮆 𡮇 𡮈 𡮉 𡮊 𡮋 𡮌 𡮍 𡮎 𡮏 𡮐 𡮑 𡮒 𡮓 𡮔 𡮕 𡮖 𡮗 𡮘 𡮙 𡮚 𡮛 𡮜 𡮝 𡮞 𡮟 𡮠 𡮡 𡮢 𡮣 𡮤 𡮥 𡮦 𡮧 𡮨 𡮩 𡮪 𡮫 𡮬 𡮭 𡮮 𡮯 𡮰 𡮱 𡮲 𡮳 𡮴 𡮵 𡮶 𡮷 𡮸 𡮹 𡮺 𡮻 𡮼 𡮽 𡮾 𡮿 𡯀 𡯁 𡯂 𡯃 𡯄 𡯅 𡯆 𡯇 𡯈 𡯉 𡯊 𡯋 𡯌 𡯍 𡯎 𡯏 𡯐 𡯑 𡯒 𡯓 𡯔 𡯕 𡯖 𡯗 𡯘 𡯙 𡯚 𡯛 𡯜 𡯝 𡯞 𡯟 𡯠 𡯡 𡯢 𡯣 𡯤 𡯥 𡯦 𡯧 𡯨 𡯩 𡯪 𡯫 𡯬 𡯭 𡯮 𡯯 𡯰 𡯱 𡯲 𡯳 𡯴 𡯵 𡯶 𡯷 𡯸 𡯹 𡯺 𡯻 𡯼 𡯽 𡯾 𡯿 𡰀 𡰁 𡰂 𡰃 𡰄 𡰅 𡰆 𡰇 𡰈 𡰉 𡰊 𡰋 𡰌 𡰍 𡰎 𡰏 𡰐 𡰑 𡰒 𡰓 𡰔 𡰕 𡰖 𡰗 𡰘 𡰙 𡰚 𡰛 𡰜 𡰝 𡰞 𡰟 𡰠 𡰡 𡰢 𡰣 𡰤 𡰥 𡰦 𡰧 𡰨 𡰩 𡰪 𡰫 𡰬 𡰭 𡰮 𡰯 𡰰 𡰱 𡰲 𡰳 𡰴 𡰵 𡰶 𡰷 𡰸 𡰹 𡰺 𡰻 𡰼 𡰽 𡰾 𡰿 𡱀 𡱁 𡱂 𡱃 𡱄 𡱅 𡱆 𡱇 𡱈 𡱉 𡱊 𡱋 𡱌 𡱍 𡱎 𡱏 𡱐 𡱑 𡱒 𡱓 𡱔 𡱕 𡱖 𡱗 𡱘 𡱙 𡱚 𡱛 𡱜 𡱝 𡱞 𡱟 𡱠 𡱡 𡱢 𡱣 𡱤 𡱥 𡱦 𡱧 𡱨 𡱩 𡱪 𡱫 𡱬 𡱭 𡱮 𡱯 𡱰 𡱱 𡱲 𡱳 𡱴 𡱵 𡱶 𡱷 𡱸 𡱹 𡱺 𡱻 𡱼 𡱽 𡱾 𡱿 𡲀 𡲁 𡲂 𡲃 𡲄 𡲅 𡲆 𡲇 𡲈 𡲉 𡲊 𡲋 𡲌 𡲍 𡲎 𡲏 𡲐 𡲑 𡲒 𡲓 𡲔 𡲕 𡲖 𡲗 𡲘 𡲙 𡲚 𡲛 𡲜 𡲝 𡲞 𡲟 𡲠 𡲡 𡲢 𡲣 𡲤 𡲥 𡲦 𡲧 𡲨 𡲩 𡲪 𡲫 𡲬 𡲭 𡲮 𡲯 𡲰 𡲱 𡲲 𡲳 𡲴 𡲵 𡲶 𡲷 𡲸 𡲹 𡲺 𡲻 𡲼 𡲽 𡲾 𡲿 𡳀 𡳁 𡳂 𡳃 𡳄 𡳅 𡳆 𡳇 𡳈 𡳉 𡳊 𡳋 𡳌 𡳍 𡳎 𡳏 𡳐 𡳑 𡳒 𡳓 𡳔 𡳕 𡳖 𡳗 𡳘 𡳙 𡳚 𡳛 𡳜 𡳝 𡳞 𡳟 𡳠 𡳡 𡳢 𡳣 𡳤 𡳥 𡳦 𡳧 𡳨 𡳩 𡳪 𡳫 𡳬 𡳭 𡳮 𡳯 𡳰 𡳱 𡳲 𡳳 𡳴 𡳵 𡳶 𡳷 𡳸 𡳹 𡳺 𡳻 𡳼 𡳽 𡳾 𡳿 𡴀 𡴁 𡴂 𡴃 𡴄 𡴅 𡴆 𡴇 𡴈 𡴉 𡴊 𡴋 𡴌 𡴍 𡴎 𡴏 𡴐 𡴑 𡴒 𡴓 𡴔 𡴕 𡴖 𡴗 𡴘 𡴙 𡴚 𡴛 𡴜 𡴝 𡴞 𡴟 𡴠 𡴡 𡴢 𡴣 𡴤 𡴥 𡴦 𡴧 𡴨 𡴩 𡴪 𡴫 𡴬 𡴭 𡴮 𡴯 𡴰 𡴱 𡴲 𡴳 𡴴 𡴵 𡴶 𡴷 𡴸 𡴹 𡴺 𡴻 𡴼 𡴽 𡴾 𡴿 𡵀 𡵁 𡵂 𡵃 𡵄 𡵅 𡵆 𡵇 𡵈 𡵉 𡵊 𡵋 𡵌 𡵍 𡵎 𡵏 𡵐 𡵑 𡵒 𡵓 𡵔 𡵕 𡵖 𡵗 𡵘 𡵙 𡵚 𡵛 𡵜 𡵝 𡵞 𡵟 𡵠 𡵡 𡵢 𡵣 𡵤 𡵥 𡵦 𡵧 𡵨 𡵩 𡵪 𡵫 𡵬 𡵭 𡵮 𡵯 𡵰 𡵱 𡵲 𡵳 𡵴 𡵵 𡵶 𡵷 𡵸 𡵹 𡵺

慶長版尸部

尸 𠂔 𠂕 𠂖 𠂗 𠂘 𠂙 𠂚 𠂛 𠂜 𠂝 𠂞 𠂟 𠂠 𠂡 𠂢 𠂣 𠂤 𠂥 𠂦 𠂧 𠂨 𠂩 𠂪 𠂫 𠂬 𠂭 𠂮 𠂯 𠂰 𠂱 𠂲 𠂳 𠂴 𠂵 𠂶 𠂷 𠂸 𠂹 𠂺 𠂻 𠂼 𠂽 𠂾 𠂿 𠃀 𠃁 𠃂 𠃃 𠃄 𠃅 𠃆 𠃇 𠃈 𠃉 𠃊 𠃋 𠃌 𠃍 𠃎 𠃏 𠃐 𠃑 𠃒 𠃓 𠃔 𠃕 𠃖 𠃗 𠃘 𠃙 𠃚 𠃛 𠃜 𠃝 𠃞 𠃟 𠃠 𠃡 𠃢 𠃣 𠃤 𠃥 𠃦 𠃧 𠃨 𠃩 𠃪 𠃫 𠃬 𠃭 𠃮 𠃯 𠃰 𠃱 𠃲 𠃳 𠃴 𠃵 𠃶 𠃷 𠃸 𠃹 𠃺 𠃻 𠃼 𠃽 𠃾 𠃿 𠄀 𠄁 𠄂 𠄃 𠄄 𠄅 𠄆 𠄇 𠄈 𠄉 𠄊 𠄋 𠄌 𠄍 𠄎 𠄏 𠄐 𠄑 𠄒 𠄓 𠄔 𠄕 𠄖 𠄗 𠄘 𠄙 𠄚 𠄛 𠄜 𠄝 𠄞 𠄟 𠄠 𠄡 𠄢 𠄣 𠄤 𠄥 𠄦 𠄧 𠄨 𠄩 𠄪 𠄫 𠄬 𠄭 𠄮 𠄯 𠄰 𠄱 𠄲 𠄳 𠄴 𠄵 𠄶 𠄷 𠄸 𠄹 𠄺 𠄻 𠄼 𠄽 𠄾 𠄿 𠅀 𠅁 𠅂 𠅃 𠅄 𠅅 𠅆 𠅇 𠅈 𠅉 𠅊 𠅋 𠅌 𠅍 𠅎 𠅏 𠅐 𠅑 𠅒 𠅓 𠅔 𠅕 𠅖 𠅗 𠅘 𠅙 𠅚 𠅛 𠅜 𠅝 𠅞 𠅟 𠅠 𠅡 𠅢 𠅣 𠅤 𠅥 𠅦 𠅧 𠅨 𠅩 𠅪 𠅫 𠅬 𠅭 𠅮 𠅯 𠅰 𠅱 𠅲 𠅳 𠅴 𠅵 𠅶 𠅷 𠅸 𠅹 𠅺 𠅻 𠅼 𠅽 𠅾 𠅿 𠆀 𠆁 𠆂 𠆃 𠆄 𠆅 𠆆 𠆇 𠆈 𠆉 𠆊 𠆋 𠆌 𠆍 𠆎 𠆏 𠆐 𠆑 𠆒 𠆓 𠆔 𠆕 𠆖 𠆗 𠆘 𠆙 𠆚 𠆛 𠆜 𠆝 𠆞 𠆟 𠆠 𠆡 𠆢 𠆣 𠆤 𠆥 𠆦 𠆧 𠆨 𠆩 𠆪 𠆫 𠆬 𠆭 𠆮 𠆯 𠆰 𠆱 𠆲 𠆳 𠆴 𠆵 𠆶 𠆷 𠆸 𠆹 𠆺 𠆻 𠆼 𠆽 𠆾 𠆿 𠇀 𠇁 𠇂 𠇃 𠇄 𠇅 𠇆 𠇇 𠇈 𠇉 𠇊 𠇋 𠇌 𠇍 𠇎 𠇏 𠇐 𠇑 𠇒 𠇓 𠇔 𠇕 𠇖 𠇗 𠇘 𠇙 𠇚 𠇛 𠇜 𠇝 𠇞 𠇟 𠇠 𠇡 𠇢 𠇣 𠇤 𠇥 𠇦 𠇧 𠇨 𠇩 𠇪 𠇫 𠇬 𠇭 𠇮 𠇯 𠇰 𠇱 𠇲 𠇳 𠇴 𠇵 𠇶 𠇷 𠇸 𠇹 𠇺 𠇻 𠇼 𠇽 𠇾 𠇿 𠈀 𠈁 𠈂 𠈃 𠈄 𠈅 𠈆 𠈇 𠈈 𠈉 𠈊 𠈋 𠈌 𠈍 𠈎 𠈏 𠈐 𠈑 𠈒 𠈓 𠈔 𠈕 𠈖 𠈗 𠈘 𠈙 𠈚 𠈛 𠈜 𠈝 𠈞 𠈟 𠈠 𠈡 𠈢 𠈣 𠈤 𠈥 𠈦 𠈧 𠈨 𠈩 𠈪 𠈫 𠈬 𠈭 𠈮 𠈯 𠈰 𠈱 𠈲 𠈳 𠈴 𠈵 𠈶 𠈷 𠈸 𠈹 𠈺 𠈻 𠈼 𠈽 𠈾 𠈿 𠉀 𠉁 𠉂 𠉃 𠉄 𠉅 𠉆 𠉇 𠉈 𠉉 𠉊 𠉋 𠉌 𠉍 𠉎 𠉏 𠉐 𠉑 𠉒 𠉓 𠉔 𠉕 𠉖 𠉗 𠉘 𠉙 𠉚 𠉛 𠉜 𠉝 𠉞 𠉟 𠉠 𠉡 𠉢 𠉣 𠉤 𠉥 𠉦 𠉧 𠉨 𠉩 𠉪 𠉫 𠉬 𠉭 𠉮 𠉯 𠉰 𠉱 𠉲 𠉳 𠉴 𠉵 𠉶 𠉷 𠉸 𠉹 𠉺 𠉻 𠉼 𠉽 𠉾 𠉿 𠊀 𠊁 𠊂 𠊃 𠊄 𠊅 𠊆 𠊇 𠊈 𠊉 𠊊 𠊋 𠊌 𠊍 𠊎 𠊏 𠊐 𠊑 𠊒 𠊓 𠊔 𠊕 𠊖 𠊗 𠊘 𠊙 𠊚 𠊛 𠊜 𠊝 𠊞 𠊟 𠊠 𠊡 𠊢 𠊣 𠊤 𠊥 𠊦 𠊧 𠊨 𠊩 𠊪 𠊫 𠊬 𠊭 𠊮 𠊯 𠊰 𠊱 𠊲 𠊳 𠊴 𠊵 𠊶 𠊷 𠊸 𠊹 𠊺 𠊻 𠊼 𠊽 𠊾 𠊿 𠋀 𠋁 𠋂 𠋃 𠋄 𠋅 𠋆 𠋇 𠋈 𠋉 𠋊 𠋋 𠋌 𠋍 𠋎 𠋏 𠋐 𠋑 𠋒 𠋓 𠋔 𠋕 𠋖 𠋗 𠋘 𠋙 𠋚 𠋛 𠋜 𠋝 𠋞 𠋟 𠋠 𠋡 𠋢 𠋣 𠋤 𠋥 𠋦 𠋧 𠋨 𠋩 𠋪 𠋫 𠋬 𠋭 𠋮 𠋯 𠋰 𠋱 𠋲 𠋳 𠋴 𠋵 𠋶 𠋷 𠋸 𠋹 𠋺 𠋻 𠋼 𠋽 𠋾 𠋿 𠌀 𠌁 𠌂 𠌃 𠌄 𠌅 𠌆 𠌇 𠌈 𠌉 𠌊 𠌋 𠌌 𠌍 𠌎 𠌏 𠌐 𠌑 𠌒 𠌓 𠌔 𠌕 𠌖 𠌗 𠌘 𠌙 𠌚 𠌛 𠌜 𠌝 𠌞 𠌟 𠌠 𠌡 𠌢 𠌣 𠌤 𠌥 𠌦 𠌧 𠌨 𠌩 𠌪 𠌫 𠌬 𠌭 𠌮 𠌯 𠌰 𠌱 𠌲 𠌳 𠌴 𠌵 𠌶 𠌷 𠌸 𠌹 𠌺 𠌻 𠌼 𠌽 𠌾 𠌿 𠍀 𠍁 𠍂 𠍃 𠍄 𠍅 𠍆 𠍇 𠍈 𠍉 𠍊 𠍋 𠍌 𠍍 𠍎 𠍏 𠍐 𠍑 𠍒 𠍓 𠍔 𠍕 𠍖 𠍗 𠍘 𠍙 𠍚 𠍛 𠍜 𠍝 𠍞 𠍟 𠍠 𠍡 𠍢 𠍣 𠍤 𠍥 𠍦 𠍧 𠍨 𠍩 𠍪 𠍫 𠍬 𠍭 𠍮 𠍯 𠍰 𠍱 𠍲 𠍳 𠍴 𠍵 𠍶 𠍷 𠍸 𠍹 𠍺 𠍻 𠍼 𠍽 𠍾 𠍿 𠎀 𠎁 𠎂 𠎃 𠎄 𠎅 𠎆 𠎇 𠎈 𠎉 𠎊 𠎋 𠎌 𠎍 𠎎 𠎏 𠎐 𠎑 𠎒 𠎓 𠎔 𠎕 𠎖 𠎗 𠎘 𠎙 𠎚 𠎛 𠎜 𠎝 𠎞 𠎟 𠎠 𠎡 𠎢 𠎣 𠎤 𠎥 𠎦 𠎧 𠎨 𠎩 𠎪 𠎫 𠎬 𠎭 𠎮 𠎯 𠎰 𠎱 𠎲 𠎳 𠎴 𠎵 𠎶 𠎷 𠎸 𠎹 𠎺 𠎻 𠎼 𠎽 𠎾 𠎿 𠏀 𠏁 𠏂 𠏃 𠏄 𠏅 𠏆 𠏇 𠏈 𠏉 𠏊 𠏋 𠏌 𠏍 𠏎 𠏏 𠏐 𠏑 𠏒 𠏓 𠏔 𠏕 𠏖 𠏗 𠏘 𠏙 𠏚 𠏛 𠏜 𠏝 𠏞 𠏟 𠏠 𠏡 𠏢 𠏣 𠏤 𠏥 𠏦 𠏧 𠏨 𠏩 𠏪 𠏫 𠏬 𠏭 𠏮 𠏯 𠏰 𠏱 𠏲 𠏳 𠏴 𠏵 𠏶 𠏷 𠏸 𠏹 𠏺 𠏻 𠏼 𠏽 𠏾 𠏿 𠐀 𠐁 𠐂 𠐃 𠐄 𠐅 𠐆 𠐇 𠐈 𠐉 𠐊 𠐋 𠐌 𠐍 𠐎 𠐏 𠐐 𠐑 𠐒 𠐓 𠐔 𠐕 𠐖 𠐗 𠐘 𠐙 𠐚 𠐛 𠐜 𠐝 𠐞 𠐟 𠐠 𠐡 𠐢 𠐣 𠐤 𠐥 𠐦 𠐧 𠐨 𠐩 𠐪 𠐫 𠐬 𠐭 𠐮 𠐯 𠐰 𠐱 𠐲 𠐳 𠐴 𠐵 𠐶 𠐷 𠐸 𠐹 𠐺 𠐻 𠐼 𠐽 𠐾 𠐿 𠑀 𠑁 𠑂 𠑃 𠑄 𠑅 𠑆 𠑇 𠑈 𠑉 𠑊 𠑋 𠑌 𠑍 𠑎 𠑏 𠑐 𠑑 𠑒 𠑓 𠑔 𠑕 𠑖 𠑗 𠑘 𠑙 𠑚 𠑛 𠑜 𠑝 𠑞 𠑟 𠑠 𠑡 𠑢 𠑣 𠑤 𠑥 𠑦 𠑧 𠑨 𠑩 𠑪 𠑫 𠑬 𠑭 𠑮 𠑯 𠑰 𠑱 𠑲 𠑳 𠑴 𠑵 𠑶 𠑷 𠑸 𠑹 𠑺 𠑻 𠑼 𠑽 𠑾 𠑿 𠒀 𠒁 𠒂 𠒃 𠒄 𠒅 𠒆 𠒇 𠒈 𠒉 𠒊 𠒋 𠒌 𠒍 𠒎 𠒏 𠒐 𠒑 𠒒 𠒓 𠒔 𠒕 𠒖 𠒗 𠒘 𠒙 𠒚 𠒛 𠒜 𠒝 𠒞 𠒟 𠒠 𠒡 𠒢 𠒣 𠒤 𠒥 𠒦 𠒧 𠒨 𠒩 𠒪 𠒫 𠒬 𠒭 𠒮 𠒯 𠒰 𠒱 𠒲 𠒳 𠒴 𠒵 𠒶 𠒷 𠒸 𠒹 𠒺 𠒻 𠒼 𠒽 𠒾 𠒿 𠓀 𠓁 𠓂 𠓃 𠓄 𠓅 𠓆 𠓇 𠓈 𠓉 𠓊 𠓋 𠓌 𠓍 𠓎 𠓏 𠓐 𠓑 𠓒 𠓓 𠓔 𠓕 𠓖 𠓗 𠓘 𠓙 𠓚 𠓛 𠓜 𠓝 𠓞 𠓟 𠓠 𠓡 𠓢 𠓣 𠓤 𠓥 𠓦 𠓧 𠓨 𠓩 𠓪 𠓫 𠓬 𠓭 𠓮 𠓯 𠓰 𠓱 𠓲 𠓳 𠓴 𠓵 𠓶 𠓷 𠓸 𠓹 𠓺 𠓻 𠓼 𠓽 𠓾 𠓿 𠔀 𠔁 𠔂 𠔃 𠔄 𠔅 𠔆 𠔇 𠔈 𠔉 𠔊 𠔋 𠔌 𠔍 𠔎 𠔏 𠔐 𠔑 𠔒 𠔓 𠔔 𠔕 𠔖 𠔗 𠔘 𠔙 𠔚 𠔛 𠔜 𠔝 𠔞 𠔟 𠔠 𠔡 𠔢 𠔣 𠔤 𠔥 𠔦 𠔧 𠔨 𠔩 𠔪 𠔫 𠔬 𠔭 𠔮 𠔯 𠔰 𠔱 𠔲 𠔳 𠔴 𠔵 𠔶 𠔷 𠔸 𠔹 𠔺 𠔻 𠔼 𠔽 𠔾 𠔿 𠕀 𠕁 𠕂 𠕃 𠕄 𠕅 𠕆 𠕇 𠕈 𠕉 𠕊 𠕋 𠕌 𠕍 𠕎 𠕏 𠕐 𠕑 𠕒 𠕓 𠕔 𠕕 𠕖 𠕗 𠕘 𠕙 𠕚 𠕛 𠕜 𠕝 𠕞 𠕟 𠕠 𠕡 𠕢 𠕣 𠕤 𠕥 𠕦 𠕧 𠕨 𠕩 𠕪 𠕫 𠕬 𠕭 𠕮 𠕯 𠕰 𠕱 𠕲 𠕳 𠕴 𠕵 𠕶 𠕷 𠕸 𠕹 𠕺 𠕻 𠕼 𠕽 𠕾 𠕿 𠖀 𠖁 𠖂 𠖃 𠖄 𠖅 𠖆 𠖇 𠖈 𠖉 𠖊 𠖋 𠖌 𠖍 𠖎 𠖏 𠖐 𠖑 𠖒 𠖓 𠖔 𠖕 𠖖 𠖗 𠖘 𠖙 𠖚 𠖛 𠖜 𠖝 𠖞 𠖟 𠖠 𠖡 𠖢 𠖣 𠖤 𠖥 𠖦 𠖧 𠖨 𠖩 𠖪 𠖫 𠖬 𠖭 𠖮 𠖯 𠖰 𠖱 𠖲 𠖳 𠖴 𠖵 𠖶 𠖷 𠖸 𠖹 𠖺 𠖻 𠖼 𠖽 𠖾 𠖿 𠗀 𠗁 𠗂 𠗃 𠗄 𠗅 𠗆 𠗇 𠗈 𠗉 𠗊 𠗋 𠗌 𠗍 𠗎 𠗏 𠗐 𠗑 𠗒 𠗓 𠗔 𠗕 𠗖 𠗗 𠗘 𠗙 𠗚 𠗛 𠗜 𠗝 𠗞 𠗟 𠗠 𠗡 𠗢 𠗣 𠗤 𠗥 𠗦 𠗧 𠗨 𠗩 𠗪 𠗫 𠗬 𠗭 𠗮 𠗯 𠗰 𠗱 𠗲 𠗳 𠗴 𠗵 𠗶 𠗷 𠗸 𠗹 𠗺 𠗻 𠗼 𠗽 𠗾 𠗿 𠘀 𠘁 𠘂 𠘃 𠘄 𠘅 𠘆 𠘇 𠘈 𠘉 𠘊 𠘋 𠘌 𠘍 𠘎 𠘏 𠘐 𠘑 𠘒 𠘓 𠘔 𠘕 𠘖 𠘗 𠘘 𠘙 𠘚 𠘛 𠘜 𠘝 𠘞 𠘟 𠘠 𠘡 𠘢 𠘣 𠘤 𠘥 𠘦 𠘧 𠘨 𠘩 𠘪 𠘫 𠘬 𠘭 𠘮 𠘯 𠘰 𠘱 𠘲 𠘳 𠘴 𠘵 𠘶 𠘷 𠘸 𠘹 𠘺 𠘻 𠘼 𠘽 𠘾 𠘿 𠙀 𠙁 𠙂 𠙃 𠙄 𠙅 𠙆 𠙇 𠙈 𠙉 𠙊 𠙋 𠙌 𠙍 𠙎 𠙏 𠙐 𠙑 𠙒 𠙓 𠙔 𠙕 𠙖 𠙗 𠙘 𠙙 𠙚 𠙛 𠙜 𠙝 𠙞 𠙟 𠙠 𠙡 𠙢 𠙣 𠙤 𠙥 𠙦 𠙧 𠙨 𠙩 𠙪 𠙫 𠙬 𠙭 𠙮 𠙯 𠙰 𠙱 𠙲 𠙳 𠙴 𠙵 𠙶 𠙷 𠙸 𠙹 𠙺 𠙻 𠙼 𠙽 𠙾 𠙿 𠚀 𠚁 𠚂 𠚃 𠚄 𠚅 𠚆 𠚇 𠚈 𠚉 𠚊 𠚋 𠚌 𠚍 𠚎 𠚏 𠚐 𠚑 𠚒 𠚓 𠚔 𠚕 𠚖 𠚗 𠚘 𠚙 𠚚 𠚛 𠚜 𠚝 𠚞 𠚟 𠚠 𠚡 𠚢 𠚣 𠚤 𠚥 𠚦 𠚧 𠚨 𠚩 𠚪 𠚫 𠚬 𠚭 𠚮 𠚯 𠚰 𠚱 𠚲 𠚳 𠚴 𠚵 𠚶 𠚷 𠚸 𠚹 𠚺 𠚻 𠚼 𠚽 𠚾 𠚿 𠛀 𠛁 𠛂 𠛃 𠛄 𠛅 𠛆 𠛇 𠛈 𠛉 𠛊 𠛋 𠛌 𠛍 𠛎 𠛏 𠛐 𠛑 𠛒 𠛓 𠛔 𠛕 𠛖 𠛗 𠛘 𠛙 𠛚 𠛛 𠛜 𠛝 𠛞 𠛟 𠛠 𠛡 𠛢 𠛣 𠛤 𠛥 𠛦 𠛧 𠛨 𠛩 𠛪 𠛫 𠛬 𠛭 𠛮 𠛯 𠛰 𠛱 𠛲 𠛳 𠛴 𠛵 𠛶 𠛷 𠛸 𠛹 𠛺 𠛻 𠛼 𠛽 𠛾 𠛿 𠜀 𠜁 𠜂 𠜃 𠜄 𠜅 𠜆 𠜇 𠜈 𠜉 𠜊 𠜋 𠜌 𠜍 𠜎 𠜏 𠜐 𠜑 𠜒 𠜓 𠜔 𠜕 𠜖 𠜗 𠜘 𠜙 𠜚 𠜛 𠜜 𠜝 𠜞 𠜟 𠜠 𠜡 𠜢 𠜣 𠜤 𠜥 𠜦 𠜧 𠜨 𠜩 𠜪 𠜫 𠜬 𠜭 𠜮 𠜯 𠜰 𠜱 𠜲 𠜳 𠜴 𠜵 𠜶 𠜷 𠜸 𠜹 𠜺 𠜻 𠜼 𠜽 𠜾 𠜿 𠝀 𠝁 𠝂 𠝃 𠝄 𠝅 𠝆 𠝇 𠝈 𠝉 𠝊 𠝋 𠝌 𠝍 𠝎 𠝏 𠝐 𠝑 𠝒 𠝓 𠝔 𠝕 𠝖 𠝗 𠝘 𠝙 𠝚 𠝛 𠝜 𠝝 𠝞 𠝟 𠝠 𠝡 𠝢 𠝣 𠝤 𠝥 𠝦 𠝧 𠝨 𠝩 𠝪 𠝫 𠝬 𠝭 𠝮 𠝯 𠝰 𠝱 𠝲 𠝳 𠝴 𠝵 𠝶 𠝷 𠝸 𠝹 𠝺 𠝻 𠝼 𠝽 𠝾 𠝿 𠞀 𠞁 𠞂 𠞃 𠞄 𠞅 𠞆 𠞇 𠞈 𠞉 𠞊 𠞋 𠞌 𠞍 𠞎 𠞏 𠞐 𠞑 𠞒 𠞓 𠞔 𠞕 𠞖 𠞗 𠞘 𠞙 𠞚 𠞛 𠞜 𠞝 𠞞 𠞟 𠞠 𠞡 𠞢 𠞣 𠞤 𠞥 𠞦 𠞧 𠞨 𠞩 𠞪 𠞫 𠞬 𠞭 𠞮 𠞯 𠞰 𠞱 𠞲 𠞳 𠞴 𠞵 𠞶 𠞷 𠞸 𠞹 𠞺 𠞻 𠞼 𠞽 𠞾 𠞿 𠟀 𠟁 𠟂 𠟃 𠟄 𠟅 𠟆 𠟇 𠟈 𠟉 𠟊 𠟋 𠟌 𠟍 𠟎 𠟏 𠟐 𠟑 𠟒 𠟓 𠟔 𠟕 𠟖 𠟗 𠟘 𠟙 𠟚 𠟛 𠟜 𠟝 𠟞 𠟟 𠟠 𠟡 𠟢 𠟣 𠟤 𠟥 𠟦 𠟧 𠟨 𠟩 𠟪 𠟫 𠟬 𠟭 𠟮 𠟯 𠟰 𠟱 𠟲 𠟳 𠟴 𠟵 𠟶 𠟷 𠟸 𠟹 𠟺 𠟻 𠟼 𠟽 𠟾 𠟿 𠠀 𠠁 𠠂 𠠃 𠠄 𠠅 𠠆 𠠇 𠠈 𠠉 𠠊 𠠋 𠠌 𠠍 𠠎 𠠏 𠠐 𠠑 𠠒 𠠓 𠠔 𠠕 𠠖 𠠗 𠠘 𠠙 𠠚 𠠛 𠠜 𠠝 𠠞 𠠟 𠠠 𠠡 𠠢 𠠣 𠠤 𠠥 𠠦 𠠧 𠠨 𠠩 𠠪 𠠫 𠠬 𠠭 𠠮 𠠯 𠠰 𠠱 𠠲 𠠳 𠠴 𠠵 𠠶 𠠷 𠠸 𠠹 𠠺 𠠻 𠠼 𠠽 𠠾 𠠿 𠡀 𠡁 𠡂 𠡃 𠡄 𠡅 𠡆 𠡇 𠡈 𠡉 𠡊 𠡋 𠡌 𠡍 𠡎 𠡏 𠡐 𠡑 𠡒 𠡓 𠡔 𠡕 𠡖 𠡗 𠡘 𠡙 𠡚 𠡛 𠡜 𠡝 𠡞 𠡟 𠡠 𠡡 𠡢 𠡣 𠡤 𠡥 𠡦 𠡧 𠡨 𠡩 𠡪 𠡫 𠡬 𠡭 𠡮 𠡯 𠡰 𠡱 𠡲 𠡳 𠡴 𠡵 𠡶 𠡷 𠡸 𠡹 𠡺 𠡻 𠡼 𠡽 𠡾 𠡿 𠢀 𠢁 𠢂 𠢃 𠢄 𠢅 𠢆 𠢇 𠢈 𠢉 𠢊 𠢋 𠢌 𠢍 𠢎 𠢏 𠢐 𠢑 𠢒 𠢓 𠢔 𠢕 𠢖 𠢗 𠢘 𠢙 𠢚 𠢛 𠢜 𠢝 𠢞 𠢟 𠢠 𠢡 𠢢 𠢣 𠢤 𠢥 𠢦 𠢧 𠢨 𠢩 𠢪 𠢫 𠢬 𠢭 𠢮 𠢯 𠢰 𠢱 𠢲 𠢳 𠢴 𠢵 𠢶 𠢷 𠢸 𠢹 𠢺 𠢻 𠢼 𠢽 𠢾 𠢿 𠣀 𠣁 𠣂 𠣃 𠣄 𠣅 𠣆 𠣇 𠣈 𠣉 𠣊 𠣋 𠣌 𠣍 𠣎 𠣏 𠣐 𠣑 𠣒 𠣓 𠣔 𠣕 𠣖 𠣗 𠣘 𠣙 𠣚 𠣛 𠣜 𠣝 𠣞 𠣟 𠣠 𠣡 𠣢 𠣣 𠣤 𠣥 𠣦 𠣧 𠣨 𠣩 𠣪 𠣫 𠣬 𠣭 𠣮 𠣯 𠣰 𠣱 𠣲 𠣳 𠣴 𠣵 𠣶 𠣷 𠣸 𠣹 𠣺 𠣻 𠣼 𠣽 𠣾 𠣿 𠤀 𠤁 𠤂 𠤃 𠤄 𠤅 𠤆 𠤇 𠤈 𠤉 𠤊 𠤋 𠤌 𠤍 𠤎 𠤏 𠤐 𠤑 𠤒 𠤓 𠤔 𠤕 𠤖 𠤗 𠤘 𠤙 𠤚 𠤛 𠤜 𠤝 𠤞 𠤟 𠤠 𠤡 𠤢 𠤣 𠤤 𠤥 𠤦 𠤧 𠤨 𠤩 𠤪 𠤫 𠤬 𠤭 𠤮 𠤯 𠤰 𠤱 𠤲 𠤳 𠤴 𠤵 𠤶 𠤷 𠤸 𠤹 𠤺 𠤻 𠤼 𠤽 𠤾 𠤿 𠥀 𠥁 𠥂 𠥃 𠥄 𠥅 𠥆 𠥇 𠥈 𠥉 𠥊 𠥋 𠥌 𠥍 𠥎 𠥏 𠥐 𠥑 𠥒 𠥓 𠥔 𠥕 𠥖 𠥗 𠥘 𠥙 𠥚 𠥛 𠥜 𠥝 𠥞 𠥟 𠥠 𠥡 𠥢 𠥣 𠥤 𠥥 𠥦 𠥧 𠥨 𠥩 𠥪 𠥫 𠥬 𠥭 𠥮 𠥯 𠥰 𠥱 𠥲 𠥳 𠥴 𠥵 𠥶 𠥷 𠥸 𠥹 𠥺 𠥻 𠥼 𠥽 𠥾 𠥿 𠦀 𠦁 𠦂 𠦃 𠦄 𠦅 𠦆 𠦇 𠦈 𠦉 𠦊 𠦋 𠦌 𠦍 𠦎 𠦏 𠦐 𠦑 𠦒 𠦓 𠦔 𠦕 𠦖 𠦗 𠦘 𠦙 𠦚 𠦛 𠦜 𠦝 𠦞 𠦟 𠦠 𠦡 𠦢 𠦣 𠦤 𠦥 𠦦 𠦧 𠦨 𠦩 𠦪 𠦫 𠦬 𠦭 𠦮 𠦯 𠦰 𠦱 𠦲 𠦳 𠦴 𠦵 𠦶 𠦷 𠦸 𠦹 𠦺 𠦻 𠦼 𠦽 𠦾 𠦿 𠧀 𠧁 𠧂 𠧃 𠧄 𠧅 𠧆 𠧇 𠧈 𠧉 𠧊 𠧋 𠧌 𠧍 𠧎 𠧏 𠧐 𠧑 𠧒 𠧓 𠧔 𠧕 𠧖 𠧗 𠧘 𠧙 𠧚 𠧛 𠧜 𠧝 𠧞 𠧟 𠧠 𠧡 𠧢 𠧣 𠧤 𠧥 𠧦 𠧧 𠧨 𠧩 𠧪 𠧫 𠧬 𠧭 𠧮 𠧯 𠧰 𠧱 𠧲 𠧳 𠧴 𠧵 𠧶 𠧷 𠧸 𠧹 𠧺 𠧻 𠧼 𠧽 𠧾 𠧿 𠨀 𠨁 𠨂 𠨃 𠨄 𠨅 𠨆 𠨇 𠨈 𠨉 𠨊 𠨋 𠨌 𠨍 𠨎 𠨏 𠨐 𠨑 𠨒 𠨓 𠨔 𠨕 𠨖 𠨗 𠨘 𠨙 𠨚 𠨛 𠨜 𠨝 𠨞 𠨟 𠨠 𠨡 𠨢 𠨣 𠨤 𠨥 𠨦 𠨧 𠨨 𠨩 𠨪 𠨫 𠨬 𠨭 𠨮 𠨯 𠨰 𠨱

ており、明確な部首基準を持っていない。『慶長版』に見られる重複掲載の恣意性、また同じ漢字に対応する和訓にずれが生じた原因はこのような編纂資料の多様さに関連していると考えられる。

5. 同じ部首での重出字

5.1 各部の重出字および重複掲載が生じた理由

続いて、同じ部首での重複掲載（図6）にも注目したい。複数の部首にまたがるものとは違い、漢字の構成要素との関連性が見当たらず、字例によっては一種の誤植と見られる場合もある。特に字音や和訓、漢字注などの付属情報が完全に一致している掲出字を同じ部に重複掲載することは、検索の面で利便性に寄与せず、漢和辞書としての機能を果たしていないとも考えられる（図7）。しかし、このような重複掲載は151組304字で『慶長版』重出字全体の約半分を占める。また一部の重出字は異部首の重出字と同じく、同じ漢字に対応する和訓が異なるという特徴を有するため、無視できない課題であると思われる。

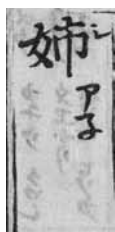
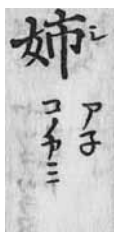


図6 女部「姉」初出(1_054_4_2) 重出(1_056_7_1)

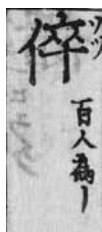


図7 人部「倅」初出(1_041_1_1) 重出(1_044_7_4)

調査を行った結果、『慶長版』における同部首の重出字は以下の通りである。重出字は全巻にわたって散在するが、上巻に集中すると見られる。また、各部首の掲載漢字の数量は括弧に入れて記す。

【上巻】(103組)

示部 (74字) 浸

玉部 (165字) 豊 瑤

土部 (246字) 培 埴 坻

人部 (456字) 倅 倅 倅 倅 倅 倅 倅 倅

倅 倅 倅 倅 倅 倅 倅 倅

倅 倅 倅 倅 倅 倅 倅 倅

倅 倅 倅 倅 倅 倅 倅 倅

伎 倅 倅 倅 倅 倅 倅 倅

倅 倅 倅 倅 倅 倅 倅 倅

女部 (194字) 姉 媛 媛 姓 媛 媛 媛

目部 (246字) 眴 眴 眴 眴 眴 眴 眴 眴

耳部 (44字) 聾

口部 (243字) 呀 台 叩 哈 呬

手部 (240字) 揉 拏 拏 拏 拏 拏 拏 拏

足部 (177字) 蹊 蹊 蹊

骨部 (57字) 髁
肉部 (214字) 胙 脰 胎 胚 膜 肌
心部 (334字) 忝 倦 愍 慷 惡 恫
言部 (166字) 讞 訐 詆 詆 詆
食部 (132字) 饒 餐

彳部 (88字) 飯
行部 (25字) 衙
走部 (85字) 趨 趨
辵部 (154字) 適

【中卷】(31組)

宀部 (78字) 宦
疒部 (137字) 療
木部 (360字) 椿 楣 椽 椳 棺 桴 柅
艸部 (406字) 苻 薊 莧 蘿 蘆 苴 菲
竹部 (238字) 筭
米部 (97字) 粽

皿部 (46字) 盪
日部 (134字) 睽
刀部 (150字) 剽 剡 剡
金部 (266字) 鎗
支部 (134字) 敢
水部 (461字) 滋 淤 汐 澀 洌 洌

【下卷】(17組)

赤部 (12字) 舛
皀部 (101字) 隍
馬部 (92字) 驪
鳥部 (198字) 鸞 鸞 鸞
魚部 (162字) 魴
虫部 (282字) 蛇 蛄 蜆

革部 (90字) 鞞
糸部 (228字) 纒
巾部 (118字) 幣
衣部 (182字) 袒
子部 (30字) 孺
酉部 (89字) 醅 醞 醞

このような多数の重複掲載が許容された背景には、『慶長版』の漢和辞書としての性格がある。本書の部首内掲出字は、『類字韻』の字音韻順配列および『音訓篇立』の字形順^xなどを共存させた結果、部内の漢字の掲載順序に一貫性が失われた。ある程度の漢字知識を有する使用者であっても、膨大な部首内掲出字より特定の漢字を探し出すことが困難となろう。このことから、『慶長版』は最初から「検索用」という機能を軽んじたと考えられる。使用者は順番に従って掲出字の全体を通観し、同一漢字が再び現れていると気付いても、その情報を初出字を上書きするのではなく、初出字に対する一種の「情報の追加・増補」として認識することが望まれたという可能性がある。そうであれば、同じ部首に同じ漢字を重複掲載することも使用上に重大な支障をきたすことがなく、編纂側にとって避ける必要がないものとなっている。

5.2 同部首での重出字の典拠

続いて、上記の重複掲載が生じた原因について検討を行う。まず特殊例として、米部の「粽」・心部の「愍」・虫部の「蛇」を取り上げる。該当する三字は初出・重出の片方がもう片方の掲出字の異体字（漢字注「同上」で記されている）として現れており、字音・和訓が掲載されていない。つまり、異体字を単独の見出しとして掲出するという『慶長版』の編纂の仕組みによるものであり、「有効」な重出字として扱うべきではないと思われる。

粽（重出） 同上 → 糭

蛇（初出） 同上 → 虵

愍（重出） 同上 → 愍

それ以外の重複掲載は一見、書写・編纂が進むと前の掲出字に関する記憶が曖昧となり、同じ漢字が重出したことに気づかないという編集上の不注意のように見える。しかし、そうすると重出字は部内漢字の数が多い部首に集中するはずであるが、実際はそうではない。406字を掲載する人部には重複掲載が45字見られるのに対して、456字の艸部では7字のみ重出する。また89字ある西部に3字重出し、228字ある糸部では1字のみ重出し、各部首に収められている掲出字と重出字の数が釣り合わないと考えられる。また「璚」（初出上巻14頁5行2段・重出15頁1行3段）「儻」（初出上巻38頁7行2段・重出39頁6行3段）のようなわずか一頁の間で重複掲載される漢字も存在するため、単に偶然の誤植だと考えるにはやや不自然なところがある。

ここではもう一度、『慶長版』の編纂事情を考えよう。前述の通り、『慶長版』における掲出字は複数の先行する漢和辞書から抄録されたものであると先行研究によって明らかとなっている。例えば、力部・雨部・日部・火部の掲出字の前半部分は永禄本『類字韻』に拠る基礎部分で、後半は『夢梅本』に拠る増補部分であると鈴木（2002b）は指摘したが、それが日部の重出字「睽」の出現位置にも確認できる。「睽」の初出は日部における4番目、重出は118番目で、それぞれ「基礎部分」と「増補部分」に該当する。つまり、一回目の抄録の後、別の辞書を参照して残りの部分を追加したことによって、このような重出が生じたと考えられる。「睽」のほか、金部の「銓」・走部の「超」「趯」といった重出字も、鈴木（2006）が提示した多元的な構造に従っているとみられる。

5.3 『慶長版』の部内重出字の採録方針

続いて、『慶長版』における重複掲載の扱い方を検討し、「同じ漢字が同じ部首に複数回現れている」ということに対して編纂側が示した姿勢について考察を行う。

前述の通り、『慶長版』には部首内の重出字が多数存在し、一見すべての重複掲載に

乾 (カン) カワク/ヒル → 乾 (カン/ケン) カハク/ヒル/ソラ/イヌイ
 (類字韻・初出) (慶長版)

乾 (ケン) ソラ/イヌイ ↗
 (類字韻・重出)

釭 (コウ) クサヒ → 釭 (コウ/カウ) クサヒ/トモシヒ/ホトキ
 (類字韻・初出) (慶長版)

釭 (カウ) ↗
 (類字韻・重出)

禁 (キン) ヤム/タワフル/トシ → 禁 (キン) ヤム/ミヤコ/タワル
 (類字韻・初出) イマシム/タワル/タエン (慶長版) タエン/イマシム/ヲサム
 ヲサム

禁 (キン) ミヤコ ↗
 (類字韻・重出)

図8 『類字韻』『慶長版』における「乾」「釭」「禁」の掲載状況

このようにして意図的に改編・統合を行った結果、元の資料における同一部首内の重出字はある程度減少した。重複掲載の漢字を削除した理由として、『類字韻』と『慶長版』で漢和辞書としての性質が変わったことがあげられる。『類字韻』はそもそも韻書であり、部首内の掲出字は字音の韻で配列されており、複数の字音を有する漢字を別々の見出し字として掲出することが一般的である。それに対して、『慶長版』の部内掲出字は一定の順序に従っていない特徴を示している。字音を複数有する場合は該当する字の左・右傍に書き記すこととなっているため、あえて複数の見出し（重複掲載）を立てる必要性がなくなったと考えられる。

一方、同じく示部・金部・皿部に掲載された「禪」「銚」「温」の重複掲載は異なる資料に由来するものであり、削除・改編が行われずに保留されている。『慶長版』の編纂者は、同じ辞書由来の重出字の数量を抑えつつ、異なる辞書から採録された字例を追加する際、たとえ重出字と初出字が隣接して掲載されているとしても、それを修正していない。

さて、『慶長版』の編纂者は同じ部首での重出字を抄録した際、なぜ異なる資料に由来する重出字に、より許容的な態度を示しているのだろうか。原因として、以下のように推

測する。

- ① 途中で編纂方針が変わった。もしくは増補部分・基礎部分は異なる著者によって書き記された。
- ② 同じ資料に由来する重出字に比べると、異なる資料のものを修正する際は既に書き記した漢字と一字ずつ照合する必要があるためより難易度が高い。

上記の二点はいずれも可能性があると考えられる。特に①の場合、『慶長版』は基本的に異なる辞書に由来する重出字のみ採録する方針に従っているが、「台・慷・剽・眠・洌・培・坻・倅・姉・媛・嫉・揉・祛・讞・訃・諄・詆・餞・適」という同じ辞書からの重複掲載が保留されている。該当する19字のうち、「眠・洌」二字以外の字例はすべて『慶長版』の上巻に集中しているため、上巻の同部首での重複掲載は三巻のうちの最多となっている。本書の編纂初期にはまだ明確な採録基準が確立していなかったとすれば、①であげる編纂方針の改変という見方と矛盾しない。また、異なる辞書から採録されたと思われる重出字には、基礎部分における初出字の字音・附訓が完全に一致しているものが多数あるため、おそらく一種の新たな情報として扱われ、意図的に保留されたものではないと推測する。つまり、『慶長版』の編纂者は、部首内での重複掲載が減少するようにある程度の努力をしたが、採録による重複掲載が生じた場合、重複掲載を削除しないこともある。つまり、同じ部首での重出字が存在していけないものとして扱うほどのこだわりがない、という姿勢を示している。

6. おわりに

掲出字一万字規模の漢和辞書として、『慶長版』は477部という膨大な数の部首を立てるうえ、うまく分類できない漢字を収納する「雑部」を有していない。となると、個々の漢字の部首配属が問題となり、少なくない重出字を生み出した。また同じ部首で複数回出現した掲出字も多数存在し、それによって『慶長版』という辞書の編纂方針が窺える。本研究では『慶長版』における重出字を集約し、部首配属や他の辞書との共通点などについて考察を行った。その結果は以下のようにまとめられる。

- ・『慶長版』全編の掲出字11,786字のうち、複数の部首に配属されたものが181組363字で約全体の3%を占めている。そのうち、掲出字が漢字の構成部品、つまり「偏」と「旁」、または「冠」と「脚」となる部首に同時に掲載されている字例が多い。
- ・重複掲載の際の部首配属に一貫性を欠き、明確な字体認識を有していないと考えられる。
- ・複数の部首での重複掲載は『慶長版』特有の仕組みではなく、先行する漢和辞書にも多数存在する。また、一部の重出字は編纂資料とされる『類字韻』や夢梅本『倭玉篇』などから由来すると考えられる。『慶長版』編纂側は、編纂資料から掲出字を抄録した

際、該当する資料の字形認識・部首配属基準を同時に引き継いだと考えられる。

- ・『慶長版』における同じ部首での重出字は151組304字であり、重出字全体の約半分を占めている。同一漢字の初出・重出はそれぞれ異なる辞書に由来するというパターンが多い。
- ・例外も存在するが、『慶長版』には部首内の重出字を抄録した際、掲出字の削除・附訓の統合などによって同じ資料に由来する重出字を減らしつつも、異なる辞書から採録された重複掲載の字例が便宜上許容され、そのまま保留された傾向が見られる。

参考文献・使用資料

川瀬一馬（1955）『古辞書の研究』大日本雄弁会講談社，pp.682-758

——（1969）「漢和字書の系譜における慶長整版倭玉篇——『字鏡』『音訓篇立』『大広益会玉篇』との対比において——」『国語学』77，pp.22-41

北恭昭（1969）「漢和字書の系譜における慶長整版倭玉篇——『字鏡』『音訓篇立』『大広益会玉篇』との対比において——」『国語学』77，pp.22-41

白井純（2012）『『落葉集小玉篇』の部首配属からみたキリシタン版の字体認識』石塚晴通 編『漢字字体史研究』勉誠出版，pp.316-338

鈴木功真（2002a）「慶長十五年版倭玉篇と類字韻・音訓篇立との関係に就いて—歯部を中心に—」『語文』（日本大学），112，pp.42-63

——（2002b）「慶長十五年倭玉篇と夢梅本との関係に就いて—力部・雨部を中心に—」『桜文論叢』（55），pp.340-314

——（2006）「慶長十五年版倭玉篇と古活字版との関係に就いて」『国語語彙史の研究』（25），pp.197-215

高橋大希・池田証壽・劉冠偉（2017）「夢梅本『倭玉篇』全文テキストデータベースの構築」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』1，pp.49-56

築島裕（1980）「東洋文庫蔵字鏡（世尊寺本）解題」『古辞書音義集成（6）』汲古書院

中田祝夫（1966）『倭玉篇 解説』中田祝夫・北恭昭編『倭玉篇 研究並びに索引』風間書房

中野直樹（2021）「五卷本『字鏡』解題：大和文華館鈴鹿文庫蔵本による」『常葉国文』36，pp.19-36

『大広益会玉篇』は『大廣益會玉篇』（中華書局，1987）を使用する。

世尊寺本『字鏡』は『字鏡（世尊寺本）』（汲古書院，1980）所収の東洋文庫蔵本の影印を使用する。

永禄本『類字韻』は東京大学国語研究室蔵本を使用する。

『音訓篇立』は山口明穂編『音訓篇立索引』（汲古書院，1985）を使用する。

古活字版（四段本）『倭玉篇』は天理図書館蔵本（請求記号813-イ-25）の複写資料を使用する。

慶長十五年版『倭玉篇』は中田祝夫・北恭昭共編の『倭玉篇 研究並びに索引』（風間書房，1966）を使用する。

『説文解字』は早稲田大学図書館古典籍総合データベースに公開された大徐本を使用する。

夢梅本『倭玉篇』は中田祝夫・北恭昭共編の『倭玉篇 夢梅本篇目次第研究並びに総合索引』（勉誠

社、1976)を使用する。

『落葉集小玉篇』は小島幸枝編の『耶蘇会板 落葉集総索引』(笠間書院、1976)を使用する。

—おう・いつしゅう、広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期修了—

ⁱ 字音が複数存在する場合は掲出字の左傍、左下、右下にも付記されている。

ⁱⁱ 字形が一致している掲出字であり、異体字は含まない。

ⁱⁱⁱ 掲出字の所在を表す番号であり、「巻数_ページ数_行数_段数」からなる。ページ数は、『倭玉篇 研究並びに索引』(風間書房、1966)によるものである。

^{iv} 『慶長版』における部首の出現順番を示す部首番号である。

^v 掲出字の所在を表す番号であり、「巻数_ページ数_行数_段数」からなる。表2の「掲出字所在」を参照。

^{vi} 3つの部首に重複掲載された字例は「束」の1字である。

^{vii} 一万字余りの『慶長版』に比べると「小玉篇」は二千字しか収録していない。「小玉篇」に現れていない漢字は当然重複掲載されることも不可能である。

^{viii} 「閑」は『説文解字』に「从門中有木」と注記されており、「木」の字義を含まない。

^{ix} 『慶長版』には「煩」「飢」「篤」、『夢梅本』には「字」「瓣」「初」という特有の重出字が存在する。

^x 「偏→旁→冠→脚」など部首である字体が掲出字内出現位置によって掲出字を配列すること。

^{xi} 日部の掲出字は総計134字である。

^{xii} 「岡岡」二字は同じの見出しで掲載されている。

^{xiii} 「纒」から「蓼」は増補部分に当たる。